

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

小山正文

一

平成十八年（二〇〇六）九月四日、東京都日野市の実践女子大学において、同大学文学部国文学科渡辺守邦教授を研究代表者とする平成十八年度科学研究費補助金による「表紙裏反古を国文学研究資料として活用する方法の開発を目指す研究」の一環として、寛永二十年（一六四三）版『黒谷上人語燈録』七冊の表紙裏より反古を取り出すワークショップが行なわれ、筆者もこれに参加した。

渡辺教授はすでにこうした抽出作業を繰り返し実施し、驚くべき研究成果をあげていること^①で知られ、今回も指導よろしきを与えて全七冊の表紙裏より、慶長十九年（一六一四）から寛永元年（一六二四）の間に印刷された古活字宗存版の断簡が、総計二十四点も出現しただけではなく、

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

その中には従来知られなかった宗存版も多数含まれていることがわかり注目された。よってここにそれらの宗存版につき報告するが、はじめにそれが取り出された『黒谷上人語燈録』につき略記しておく要がある。

題名の「黒谷上人」とは、比叡山西塔北谷の黒谷で修学し、のちに浄土宗を開いた法然房源空（一一三三〜一二二二）のことで、これはその法然の著作、法語、消息、和歌などの基本的史料を浄土宗鎮西流三条派祖の望西楼了恵道光（一二四三〜一三三〇）が、鎌倉時代末期に集録した全十八巻からなる大部な遺文集である。^②『黒谷上人語燈録』・『拾遺黒谷上人語燈録』の二部構成で、前者に漢文で書かれた漢語燈録十巻、和文で書かれた和語燈録五巻が、また後者に拾遺漢語燈録一巻、拾遺和語燈録二巻がそれぞれ取められる。^③しかして漢語燈録の序には文永十一年（一二七四）十二月八日、和語燈録のそれには翌文永十二年正月廿五日

の年月日がみえるので、前者『黒谷上人語燈録』十五巻の成立年代もほぼ察しがつく。いっぽう後者の『拾遺黒谷上人語燈録』は、その後跋に「およそ二十余年のあひた あまねく花夷をたつね くはしく真偽をあきらめて これを取捨すといへとも あやまる事おほからん 後賢かならした、すへし 又おつるところの真書あらは この拾遺に続くへし心さすところは 衆生をして浄土の正路におもむかしめんかためなりあなかしこく 望西楼沙門了恵謹疏」とある通り、前者『黒谷上人語燈録』成立後二十余年の永仁三年（一二九五）ころに編集し終えたことをうかがわせるが、それより四半世紀を経た元亨元年（一二三二）七月八日、すなわち編者了恵七十九歳のとき『黒谷上人語燈録』『拾遺黒谷上人語燈録』所収の和語燈録のみ計七巻を円智なる一向専修沙門が開版する。その際了恵は感歎にたえず隨喜のあまり老眼をのぎいて印本すなわち版下を書いたのであった。龍谷大学学術情報センター大宮図書館蔵の和語『黒谷上人語燈録』七巻は、現存唯一のその貴重な元亨元年版本である。⁴今回宗存版が抽出された寛永版『黒谷上人語燈録』七巻七冊は、最後の跋文からも知られるように右の元亨版を翻刻したものにほかならない。ただし寛永版は元亨版のひらかなをカタカナに変え、本文のかなを相当多数漢字で表記するほか、内題も和語燈録だけの通巻化がはかられており、また元亨版における各巻冒頭の収録遺文題名を寛永版では、巻第一の序文後に一括して掲載するなどの相違点がみられることを注意しておきたい。

ここでワークシヨップに供せられた寛永版『黒谷上人語燈録』の書誌を記述すれば、およそ以下の通りとなる。所蔵は川越市西小仙波の五季文庫で、七巻七冊からなり、タテ二十七・三センチ、ヨコ十七・三センチの袋綴本である。表紙は黒みがかった洪茶色紙表紙で原装。この中に補強材として宗存版が使用されている。第一冊を除く各冊表紙左肩に題簽があり、第二・四・五・六冊に「黒谷語燈録二（四・五・六）」、第三・七冊に「拾遺黒谷語燈録三（七の字今亡）」の墨書が、無辺の白紙にしたためられて貼付されているが、前の四冊と後の二冊は異筆で、四冊は当初、二冊は後補とおもわれる。なお第一冊は痕跡のみで題簽紙を失う。本文の用紙は楮紙で、第一冊三十八、第二冊四十二、第三冊三十五、第四冊三十五、第五冊二十八、第六冊二十五、第七冊三十二の丁数を数える。

各丁の匡郭は上下左右单边となっていて、版心は上下黒口、黒魚尾で第一冊の序文部分は「語灯録序一」、以下「語灯一（〜七）」の略称と丁付が柱刻される。本文は漢字カタカナまじり文で、漢字には全部ではないがふりがなを付す。半丁十一行、一行二十四字内外。表紙をかける前に紙捻一重結びの下綴じが、上下二箇所でなされている。ちなみに表紙の綴じ糸は木綿糸を使用する。内題は「黒谷上人語燈録^并序」、「黒谷上人語燈録巻第一（〜五）」、「拾遺黒谷語燈録巻第六（〜七）」となっている、各冊の目録は序のあとにまとめて「和語第一（〜五）」、「拾遺第六（〜七）」として挙げ、底本の元亨版のごとく各冊の巻頭に掲げることが

しない。第七冊巻尾には元亨版の刊記に続き「寛永癸未孟春吉日 柳馬場

二

二条下町 吉野屋権兵衛」の寛永刊記をみる。この『黒谷上人語燈録』七巻七冊が、文字通り寛永二十年（一六四三）の刊本であろうことは、その紙質、刷り具合、インクの状態よりみて疑念の余地はなく、とくに全冊表紙裏より慶長・元和期の宗存版断簡が多数みつかったところからも十分うなずけるものがあるといえよう。吉野屋権兵衛は文泉堂の堂号をもつ京都の書肆で、芳野屋ともあらわされ、林権兵衛と同じ書林であったとみるならば、寛永（一六二四）より天保（一八四四）に至るまで存続した老舗の書店である⁵⁾。なお五季文庫蔵本には題簽、内題下などに丸や角の朱印が押されているも、残念ながら印文の判読が不能で、旧蔵者を知りえない。全体に該本は湿気と虫食いによる被害が甚大で、そのため一部表紙のはがれもあって、早くから宗存版の存在が確認されていたが、今回の全面的な表紙解体作業により、予想以上の宗存版が多数出現したのであった。最後に五季文庫本と同じ寛永二十年版『黒谷上人語燈録』として大阪定専坊、大阪府立中之島図書館、大阪女子大学図書館（二巻欠）、京都大学図書館、龍谷大学学術情報センター大宮図書館（二部）、同（七巻五冊 四・五を合冊 五冊目欠）、大谷大学図書館（七巻三冊 一・二 三・四 五・六・七を合冊）、広島大学図書館、金沢大学図書館、日本総合学術情報センターの各蔵本が知られるも、これらがすべて初版本かどうかは検討の余地をのこすであろう。

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

さて、上のような五季文庫蔵寛永二十年版『黒谷上人語燈録』全七巻七冊の各前後表紙を解体した結果、表紙は洪茶色の表皮、補強材としての貼紙一ないし二枚、そして見返し用の白紙からなる三ないし四層構造であることが判明した。この場合三層であったのは、第二・四・六の偶数冊うしろ表紙で、その他の十一の前後表紙はすべて四層構造となっている。問題の宗存版は補強材として使用されているわけだが、全冊の前後表紙から見出されたその総数は二十四点にも及ぶ。いま宗存版が出現した各冊の位置をわかりやすく示しておけば次の通りとなる。

第一冊前表紙	第一冊後表紙
11-11 前表紙	12-11 見返し
11-22 宗存版(図版1)	12-22 宗存版(図版3)
11-31 宗存版(図版2)	12-31 白紙
11-41 見返し	12-42 後表皮
第二冊前表紙	第二冊後表紙
21-11 前表皮	22-11 見返し
21-22 宗存版(図版4)	22-22 宗存版(図版6)
21-31 宗存版(図版5)	22-32 後表皮

21—41 見返し

第三冊前表紙

31—11 前表皮

31—22 宗存版 (図版7)

31—31 宗存版 (図版8)

31—41 見返し

第三冊後表紙

32—11 見返し

32—22 宗存版 (図版9)

32—31 宗存版 (図版10)

32—42 後表皮

第四冊前表紙

41—11 前表皮

41—22 宗存版 (図版11)

41—31 宗存版 (図版12)

41—41 見返し

第四冊後表紙

42—11 見返し

42—22 宗存版 (図版13)

42—32 後表皮

第五冊前表紙

51—11 前表皮

51—22 宗存版 (図版14)

51—31 宗存版 (図版15)

51—41 見返し

第五冊後表紙

52—11 見返し

52—22 宗存版 (図版16)

52—31 宗存版 (図版17)

52—42 後表皮

第六冊前表紙

61—11 前表皮

61—22 宗存版 (図版18)

61—31 宗存版 (図版19)

61—41 見返し

第六冊後表紙

62—11 見返し

62—22 宗存版 (図版20)

62—32 後表皮

第七冊前表紙

71—11 前表皮

71—22 宗存版 (図版21)

71—31 宗存版 (図版22)

71—41 見返し

第七冊後表紙

72—11 見返し

72—22 宗存版 (図版23)

72—31 宗存版 (図版24)

72—42 後表皮

かくて抽出された二十四点の字面は、どれも一様に肉太で彫りも深く中世の春日版をおもわせる独特の風格ある筆体となっており、紛れもなくこれが宗存版であることをみずから語るが、これらの二十四点は一見してわかる通り、一行が十四字詰のものと十七字詰の二種類に大別できる。しかして十四字詰は宗存版のなかでも慶長十九年甲寅歳(一六一四)、元和元年乙卯歳(一六一五)の経典に、また十七字語は同三年丁巳歳(一六一七)のそれに集中することが明らかとなっているが、取り出された二十四点のうち十七点が十四字詰、残り七点が十七字詰であったから七割強が初期の宗存版で占められていることとなる。断簡状態で出て

きた二十四点の經典名を特定すると次の九種類に整理できる。それを五十音順に示すと次掲のようになり、「八」が最多で五点、ついで「二」が四点、「五」と「七」が各三点、「一」・「三」・「四」・「九」が各二点、そして「六」が最少の一点という結果が出た。

- (一) 経律異相卷第十二 (11—22 図版1・61—22 図版18)
- (二) 諸経要集卷第三 (21—31 図版5・51—22 図版14・52—22 図版16・72—22 図版23)
- (三) 大般涅槃經卷第九・同卷第十八 (31—22 図版7・52—31 図版17)
- (四) 大般若波羅蜜多經卷第九十 (42—22 図版13・62—22 図版20)
- (五) 大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經卷第四 同第八 (21—22 図版4・51—31 図版15・72—31 図版24)
- (六) 仏説秘密相經卷下 (41—31 図版12)
- (七) 付法蔵因縁伝卷第三 (12—22 図版3・22—22 図版6・31—31 図版8)
- (八) 法苑珠林卷第三十七・同卷第四十一 (11—31 図版2・32—22 図版9・41—22 図版11・61—31 図版19・71—31 図版22)
- (九) 梵網經盧舍那仏説菩薩心地法門品第十 (32—31 図版10・71—22 図版21)

以下順次各経を概観し、これらの断簡が宗存版としていかなる意味を

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

もち、それが表紙裏で、どのような使われ方がされているのかといった諸点につき検討を加えていきたい。

三

まず「一」の『経律異相』であるが、これは中国南北朝時代梁の天監十五年(五一六)に宝唱(生没年不詳)等によって集成された五十巻からなる仏教事彙辞典である。現今ではみることができない經典類もすくなくらず引用されており、『法苑珠林』と共に貴重な文献となっている。『大正藏』第五十三卷二二二(以下『大正藏』53—222)と略記する)に所収。宗存版が底本とする『高麗大藏經』では「千字文」の仙・靈・丙・舎・傍の五函に入っており、慶長十八年(一六一三)の宗存版『大藏目錄』も同函号である。⁸⁾

11—22 (図版1) は天地逆に使用されているが、十一行がみえ一行十四字詰で、宗存版としては初期に属するものである。本文は『大正藏』53の六十三ページ中段十行目から二十行目(以下『大正藏』53—p. 63—b10—20と略記する)に該当する『経律異相』卷第十二の文である。61—22 (図版18) も同巻文で、『大正藏』53—p. 63—b2—10 に出ている。61—22 は本文十行と右端糊代部分にあたるころの小活字文字「経律異相卷第十二 第十張 靈」が辛うじて読みとれ、図版18・1が

第十二巻の十紙目で、「千字文」靈函に納入されるものであることも知られ注意したい。ちなみに宗存版の一張つまり一紙は、タテ一尺（三〇・三センチ）、ヨコ一尺五寸（四五・四センチ）で、これに一行十四字の場合は二十二行、十七字の場合は二十三行を印刷するから、図版18と図版1とで一紙となり、それを二つに切断して六冊目と一冊目で使用されたことが判明しよう。

なお、宗存版の『経律異相』は、かつて高田山専修寺京都別院に巻第三・五・七・八・十・十一・十三・十四・十七・十九・二十・二十一・二十七・三十四・三十五・三十六・三十八・四十・四十五・四十六・四十八の計二十一巻が存在したが、いまはそのうちの巻第四十八が愛知本證寺に蔵せられる以外は所在不明となっている（参考図版A）。五季文庫本その断簡二点は、従来知られなかった巻第十二のものとして史料的価値がすこぶる高いといえよう。

次の（二）『諸経要集』は、唐の道世（生年不詳く六六八）が諸要文を経律論より抄出して、三十部百八十五縁に分類集成した二十巻の書で、一説にその著者は道宣（五九六く六六七）ともされる。『大正蔵』54―2123に収められ、『高麗大蔵経』では「千字文」甲・帳・対函に入り、宗存版『大蔵目録』もそうになっている。^⑨

今回その巻第三の断簡四点が取り出されたが、このうち51―22（図版14）は版端文字「諸経要集巻第三 第九張 甲」と本文九行、52―22（図版16）は天地逆で本文十二行を数え、共に一行十四字語の初期宗存

版である。『大正蔵』54―p. 21―25に該当し、図版14の九行が図版16のはじめ九行と全同する。すなわちこれは表紙をつくる装潢師の手許に『諸経要集』巻第三の反古がすくなくとも二部存したことを意味するものにほかならない。同様の現象は21―31（図版5）と72―22（図版23）でもみられる。両者は共に縦書きの経本文下二文字のところで横一律に切断され、これを寝かせて使用するため各行十二文字しか残らないが、逆に行数は縦利用の場合より多くなって、図版5では十五行、図版23では十三行を数える。二点とも版端文字は「諸経要集巻第三 第十張」が残り、その下の千字文は切断されてない。つまり両者も同一内容で、図版14・16の第九張に続く第十張の文とわかり、『大正蔵』54―p. 21―23と26と知られるが、宗存版の一行十四字詰本は、その一張（一紙）に二十二行を印刷していることを考慮するならば、図版16のあとになお七行の本文があつて、図版5・23の第十張へと接続していたこととなる。いずれにしても『諸経要集』の各二点ずつが同一内容という興味深い事実は、宗存版が印刷後ただちに製本されずそのまま放置され、ついに反古となった状況を暗示するのかもしれない。今後の重要な検討課題といわなければならないであろう。

なお、21―31（図版5）の欄外に「𠄎」の木活字文字が天地逆さでみえているが、このような場所に文字があるのは不審で、いったいこれはなにであろうか。渡辺教授の調査によれば、この字は「作」でその周辺は紙の地が光沢を帯びており、厚糊にてそれが貼付されているから、か

なり早い段階で部分補修がなされ、その際「作」の字を印刷した断片を用いたのではなからうかとのことであった。妥当な見解とおもわれる。

宗存版『諸経要集』の完全品は目下のところ一卷も存在しない。間島由美子氏の報告によると国立国会図書館蔵の正保三年（一六四六）刊『太閤記』（請求記号一三一―七八）第二・十二・十五・十六・十八・十九・二十冊の各うしろ表紙裏貼にも、その巻第二・第八の断簡が使用されているという¹⁰。この正保三年刊『太閤記』と主題の寛永二十年（一六四三）刊『黒谷上人語燈録』は、共に京都で刊行されたまったく同時代の出版物として注目され、あるいはそれらの表紙は同じ装潢師の工房でなったことも考えられるかもしれない。

〔二〕は『大般涅槃経』である。同経には北涼曇無讖（三八五―四三三）訳の北本四十巻本と宋慧嚴等による南本三十六巻本の二種が存し、北本は『大正蔵』12―374に、また南本は同一375に所収される。

52―31（図版17）、31―22（図版7）はともに南本の断簡で、前者は『大正蔵』12―p. 661―e2―6の巻第九、後者は同p. 728―b20―e2の巻第十八の文である。『高麗大蔵経』、宗存版『大蔵目録』では、「千字文」¹¹ 函号の勿・多・士・寔に納入される。現在所在不明であるが、山城平等心王院旧蔵の宗存版同経巻第七に「甲寅歳大日本国大蔵都監奉／勅彫造」の刊記がみられるところより、この断簡二枚も一行十四字詰であること¹²とあいまち慶長十九年甲寅歳（一六一四）の印刷と判定してよからう。図版17はわずかに五行のみがみえ、しかもその初行は半分以上文字が欠

け、他行も上の一字が消えているなどまったくの刷り損い品で、これこそまさに反古紙というにふさわしいものである。これに対し図版7は天地逆使用されているものの一行十四字詰十二行を残す典型的な初期宗存版の断簡として珍重すべきものといえよう。

宗存版『大般涅槃経』の断簡は、これとは別に愛知本證寺、京都宝蔵院などにもあって、いずれも一行十四文字の慶長十九年版南本三十六巻本で、本證寺のものはその巻第三十一にあたる（参考図版B）。

〔四〕の『大般若波羅蜜多経』は、かの有名な三蔵法師玄奘（六〇二―六六四）によって訳出された六百巻からなる最大の仏教経典で、わが国へは飛鳥寺元興寺の道昭（六二八―七〇〇）が、玄奘と出会っていることもあって早く將來され、爾来独特の大般若経信仰を形成するまでに至っていることは、すでに周知のところであろう。『大正蔵』は5―120、『高麗大蔵経』は天々奈の「千字文」函号に収められ、宗存版『大蔵目録』も同様である。

62―22（図版20）、42―22（図版13）の二点が取り出されたが、共に保存は良好でない。図版20は十二行、図版13は八行で、一行十七字詰となっているから中期宗存版と鑑せられる。図版20は『大正蔵』5―p. 504―a2―14、天地逆使用の図版13はそれに続くa15―22に、『大般若経』巻第九十の断簡とわかる。二点あわせて二十行となり、そのあとなお三分分の余白をみるので、一行十七字詰の一張（紙）二十三行分を二つに切断して利用したものとおもわれる。なお、図版13の末行左側上下

に、これが木活字印刷であることを証明する詰めもの材の線がうつつているのも見逃せないところで、宗存版に使用されたこうした罫線材や行間材の原物は、その多数の木活字と共に比叡山延暦寺に所蔵されており、平成十二年(二〇〇〇)には重要文化財の指定を受けているが、図版13の場合行間材がうつつているあとに上記のごとく三分分の文が続いて一張を終えるべきであるのにそうっていないのは、これが刷りやれであったからであろう。

宗存版の『大般若経』については、従来からも愛知本證寺、京都毘沙門堂、奈良桜本坊などにその零本の存在がいわれてきたが(参考図版C)、近年奈良東大寺、大安寺、金龍寺などに全巻完存する旨の報告がなされ耳目を驚かせている。¹⁵ただ宗存版の折本経典は一行十四字詰も十七字詰も共にその字高は約七寸(二十一・二センチ)と一定しているのに、東大寺のそれは十九・八、大安寺は二十・八、金龍寺は二十・三センチで、いずれも七寸を切っている点やや気になる。真にそれが宗存版『大般若経』かどうか、今後さらに検討を重ねる必要性が痛感されてならないところである。

〔五〕の『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』は、唐の般刺密帝訳の經典で十巻よりなり、『大仏頂首楞嚴経』と略称される。『大正蔵』19—945に所載され、『高麗大蔵経』および宗存版『大蔵目錄』の「千字文」¹⁶ 函号は糸である。断簡三点の抽出をみたが、このうち51—31(図版15)は、十六行を残すも各行上三字が切断されて横向きに使

用する。本文は『大正蔵』19—p. 120—a17—29にみえる巻第四のものと判明する。保存はあまりよくない。21—22(図版4)は糊代の小活文字「首楞嚴経卷第八 第十八張 糸」より、『大正蔵』19—p. 145—a18—27の文とわかり、72—31(図版24)はそれに続くa27—b7であるから、二点あわせて巻第八の第十八張をなしていたことが推定できる。ただしここでは一行が十四字詰であるにもかかわらず、十七字詰の場合と同様に一紙二十三行となっているのが注意される。宗存版が十四字詰から十七字詰へ移行しつつある元和三年(一六一七)初めころのものであろう。

ちなみに前記した国立国会図書館蔵の正保三年刊『太閤記』の第二冊、第四冊、第五冊うしろ表紙の表にも宗存版『首楞嚴経』巻第五、巻第一の断簡が使用されていることを問島氏は報告している。

〔六〕『仏説秘密相経』は上中下の三巻からなり、宋の施護(九八〇頃)によって訳出された密教經典で、『大正蔵』18—884、『高麗大蔵経』の「千字文」¹⁷ 精函に納められ、宗存版『大蔵目錄』も同じである。41—31(図版12)には十七行が残るものの一行十四字詰の上部一文字を横に切断し寝かせた格好で用いられている。保存状態はあまりよくないが、『大正蔵』18—p. 468—c14—p. 469—a7にみえる同経巻下の文である。この『秘密相経』はたとえ一片の断簡であっても、従来まったく知られなかった宗存版の新出資料で、その価値はすこぶる高いといわなければならぬ。同経の他断簡が出なかったため一張(紙)に何行刷られていたのか

わからないが、字詰よりみて慶長十九年か元和元年の初期宗存版とみてよいであろう。貴重な発見である。

〔七〕の『付法蔵因縁伝』は、北魏の延興二年（四七二）に西域の吉迦夜と雲岡石窟の開鑿を奉請したことで有名な曇曜とによって訳出された釈迦滅後におけるインド仏教の付法次第相承の因縁を記した六巻からなるものである。『大正蔵』50—2038に収められ、『高麗大蔵経』・宗存版『大蔵目錄』ともに「千字文」飛函に入れられる。取り出された22—22（図版6）は『大正蔵』50—p. 306—a7—18、12—22（図版3）は同b24—c6、31—31（図版8）は同p. 308—c9—20のいずれも巻第三の文で、その接近した行や頁数より推測して、もとは一連のものであったのを適宜裁断のうえ各所に転用したとみられる。京都智積院の運敵蔵にこの『付法蔵因縁伝』全六巻の宗存版が存し、「丁巳歳日本国大蔵都監奉勅雕造」の刊記があつて、これが元和三年（一六一七）丁巳歳の印本と断定できる。三点の断簡とも一行十七字詰であることも右の刊記と矛盾しない。図版6は天地逆置利用されており、保存状態もあまりよくないが十一行を残す。図版3も十一行を数え、印面状況は比較的良好である。上部に詰め物の線が一部みえている。図版8も保存状態はよいほうで、十二行近くを残す。なお、『付法蔵因縁伝』をうしろ表紙の補強材に使う宗存版に愛知本證寺蔵元和元年（一六一五）乙卯歳刊の『讚觀世音菩薩頌』がある。高田山専修寺京都別院にはかつて『付法蔵因縁伝』の全巻を蔵していたが、いまは所在がわからない。

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

〔八〕『法苑珠林』百巻は、唐の道世が著わした仏教事典の一種で、綜章元年（六六八）の成立。『大正蔵』53—2122に収載され、『高麗大蔵経』では「千字文」霸々何の十四函に入れられる。宗存版『大蔵目錄』も同様である。今回最多の五点が取り出されたが、いずれも保存状態が悪く失われた文字や欠損箇所が目立つものが多い。32—22（図版9）、71—31（図版22）、11—31（図版2）、41—22（図版11）の四点は巻第三十七、61—31（図版19）は巻第四十一の文となっていることが、『大正蔵』53—p. 579—b26—c.5、同c16—26（以上図版9・22・2）、同p. 580—a13—21（図版11）、同p. 608—b13—24（図版19）によつてわかる。図版9と図版22は同内容であり、やはり共に一行十四文字詰、十一行をみる。ここでも裝潢師の手許に二部の『法苑珠林』が、反古として利用されていた事実がわかり興味深い。図版2は天地逆置使用で一行十四字詰、十一行を数える。図版11も天地逆で十四字詰、十行を残す。図版19は横使用のため十五行を数えるも、字詰は上の四点とは異なり十七文字で、各行下二文字半のところを切断されている。すなわち巻第三十七と巻第四十一とでは、一行の字詰が相違しているのである。これは『法苑珠林』の印刷が、一行十四字詰、一張二十二行から、一行十七字詰、一張二十三行へと移行していく元和元年（一六一五）より同三年（一六一七）のころに行なわれたことを物語るものであろう。

ところで、宗存版の『法苑珠林』といえば、元和七年（一六二二）九月十五日から寛永元年（一六二四）十二月二十七日まで前後四年を費し

て全百卷を完成させたそれが滋賀比叡山文庫、台北故宮博物院、東京宮内庁書陵部、同お茶の水図書館成篋堂文庫、同大東急記念文庫、栃木輪王寺等々にあつてつとに有名である。ところがこれらの『法苑珠林』は、いずれもみな匡郭、版心、上下花口魚尾、黒口をもつ袋綴冊子本で、今回出現した折本經典用のものとは大きく異なることに注意しなければならぬ。つまり宗存版『法苑珠林』には、二種類の版が存した事実を紙裏から取り出されたこれらの反古は明らかにしたわけで、大きな成果のひとつであつたといえよう。

ちなみにいう。宗存版『法苑珠林』の断簡を表紙裏貼に補強材として使用する宗存版には、このほかに栃木輪王寺天海蔵元和七年（一六一二）刊の源信記『枕双紙』などがある。²⁴

〔九〕『梵網經盧舍那仏説菩薩心地法門品第十』は、略して単に『梵網經』といわれ、普通「戒品」とあらわされるところが、ここでは「法門品」となっている。本經は後秦の鳩摩羅什（三四四〜四一三）によって訳された大乘菩薩戒の根本經典で二卷からなり、奈良唐招提寺などでは今もこれを日夜誦する。『大正蔵』24—148に収められ、『高麗大蔵經』宗存版『大蔵目錄』の「千字文」賢にそれを見ることができ²⁵。71—22（図版21）は本經の巻頭部分にあたり、一行十七字詰、十一行を数えるが、傷みにともなう欠損で失われた文字も若干存する。『大正蔵』24—p. 1003—b5—17の文である。32—31（図版10）はそれに続くb18—c3に相当し十二行を残すから、両者あわせて二十三行となり、これで一張

（紙）を形成していたとおもわれる。こうした行数・字詰より判断すると、この『梵網經』は元和三年（一六一七）丁巳歳刊行の可能性が高いであろう。本證寺蔵宗存版『梵網經』の巻頭写真を参考までに掲げておく（参考図版D）。

四

以上、川越市五季文庫蔵の寛永二十年（一六四三）版『黒谷上人語燈録』七冊の表紙裏より抽出された宗存版の反古につき概観したが、ここであらためそれらを整理し、いかなる学術的意義がもたらされたのかをまとめ結びとしたい。

今回出現した宗存版は、江戸初期版本の表紙に特有の補強材としてのそれであるから、すべて断片的なものばかりで、その当初の大きさはタテ一尺（三十・三センチ）、ヨコ七寸五分（二十二・七センチ）に裁ちそろえられていたとおもわれる。それを書冊の大きさタテ九寸（二十七・三センチ）、ヨコ五寸七分（十七・三センチ）に合わせて折り曲げ、片方の上下かどを裁断し使用するのである。その場合経本文とは無関係に裁ち切られていくから、使用する際は11—22（図版1）、11—31（図版2）、22—22（図版6）、31—22（図版7）、41—22（図版11）、42—22（図版13）、52—22（図版16）のように経文が天地逆になったり、21—31（図版5）、41—31（図版12）、51—31（図版15）、61—31（図版19）、72—

22 (図版23)のごとくそれが横さまになることも珍しくない。

各冊に使用される宗存版の枚数は、第一冊前表紙二枚、後表紙一枚。第二冊前表紙二枚、後表紙一枚。第三冊前表紙二枚、後表紙二枚。第四冊前表紙二枚、後表紙一枚。第五冊前表紙二枚、後表紙二枚。第六冊前表紙二枚、後表紙一枚。第七冊前表紙二枚、後表紙二枚となり前表紙は必ず二枚であるのに、後表紙は一枚が四冊、二枚が三冊であった。もっとも一枚の場合は白紙が一枚加わるので、枚数的には同じである。

取り出された宗存版の行数や字詰を調べてみると、経文が縦書きで残る場合十一行が八例、十二行が七例となって、両者で全体の七割を占める。十三行以上残存するのは経文が横さまになっている場合で、五例が存する。残りの四例は縦経文であるが、全文が刷られていなかったり、版端に余白を残すものとなっている。これに対し一行あたりの文字数は、横さまで裁ち落されているのも字間より判断して眺めると十四字詰が十六例、十七字詰が八例みられる。しかして宗存版はつとに指摘されているようにタテ一尺(三十・三センチ)、ヨコ一尺五寸(四十五・四センチ)を一張とする楮紙に十四字詰の場合は二十二行、十七字詰の際は二十三行の経文を印刷し、前者は慶長十九年(一六一四)甲寅歳、元和元年(一六一五)乙卯歳の全部と同三年(一六一七)丁巳歳の一部が、また後者は丁巳歳のほとんどとそれ以降のそれぞれ刊記をもつ經典となっているから、今回抽出の宗存版の三分の一は前者の古版に属することがわかる。

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

慶長十八年(一六一三)正月に発願着手され寛永元年(一六二四)十二月末に途絶する宗存の開版事業は、經典の場合高麗再雕本を底本にしたことが、慶長十八年の『大蔵目録』上中下三巻ならびに高麗版の刊記をそのまま模倣した刊記、および高麗版と同じ「千字文」函号を用いているところからもわかる。したがって今回見出された經典もすべて『高麗大蔵経』に入っているものばかりとなっており、次の九点が確認された。

- (一) 経律異相卷第十二
 - (二) 諸経要集卷第三
 - (三) 大般若涅槃经卷第九、十八
 - (四) 大般若波羅蜜多经卷第九十
 - (五) 大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴经卷第四、八
 - (六) 仏説秘密相经卷下
 - (七) 付法蔵因縁伝卷第三
 - (八) 法苑珠林卷第三十七、四十一
 - (九) 梵網経盧舎那仏説菩薩心地法門品第十
- これらのうち〔六〕は従来まったく知られなかった宗存版として、その出現の意義ははなはだ大きいものがある。また〔八〕は元和七年(一六二二)から寛永元年(一六二四)までかけて刊行された宗存版のそれとは異版のこれまた新出版である。いっぽうこれまでもその宗存版の存在はわかっていたが、当該巻が欠巻であったものに〔一〕、〔二〕、〔三〕、

〔四〕、〔五〕、〔九〕がある。このように今回の宗存版は、断片ばかりとはいえ〔七〕以外のすべてが新発見品であるから、その価値は実に絶大といわなければならない。

ところで、〔一〕の図版18と1、〔四〕の図版20と13、〔五〕の図版4と24、〔九〕の図版21と10は、それぞれもつながっていたのが切断されて別々のところで使われている事例とみられる。また同一經典の同内容文が二つあるものに、〔三〕の図版14と16、同じく〔三〕の図版5と23、〔八〕の図版9と22があつて、表紙をつくる装潢師の手許に宗存版の同一經典反古が、すくなくとも二部存したことを示している。

なお、版端の糊付部分に小活字で経名や張数、千字文などを記す例として、〔一〕の図版18、〔二〕の図版5・14・23、〔五〕の図版4などがある。

今回出てきた宗存版と同じ經典名のそれをやはり表紙裏の補強材に使っている事例に、愛知本證寺蔵元和元年（一六一五）刊宗存版『讚觀世音菩薩頌』の〔七〕、栃木輪王寺蔵同七年（一六二一）刊宗存版源信記『枕双紙』の〔八〕、東京国立国会図書館蔵正保三年（一六四六）刊『太閤記』の〔二〕・〔五〕があり、そのほか京都毘沙門堂蔵天海版一切経の包紙帙心にも〔四〕が用いられているなど、かなりの数量が出回っている事実は一体いかに解したらよいのであろうか。これについてはもちろん宗存版が、北野経王堂で印刷された際の試し刷りや刷り損い、刷りやりなどを転用していることも当然考えられるが、ひとつの極論に近い見

方として、宗存版の經典類は刷られたまま放置されていて、經典としては完成せず、それが装潢師の手にわたったというような事態も想定されるかもしれない²⁶。なぜかという点天海版の場合も全部ではないが、京都本閤寺蔵本などは慶安元年（一六四八）の完成後四十年近くを経た天和貞享（一六八三〜八七）ころに製本されている事実があり、また宗存版の經典類は高田山専修寺京都別院本誓寺の宝性院恵雲（一六一三〜九一）、京都智積院の運敵（一六一四〜九三）、名古屋大須観音真福寺の宥濟（一六一七〜八七）、江州金森善立寺の西福寺光遠院恵空（一六四四〜一七二一）などが、印刷直後ではなくかなり年数を経ってから同じころにそれを入手所持していることなどもあつて、そのように考えても自然でないからである。もっともその場合宗存版反古紙がすでに使用されている寛永二十年版『黒谷上人語燈録』や正保三年版『太閤記』の段階では、恵空は生まれたばかりであり、このへんは今後のさらなる重要な検討課題といえよう。

以上のような宗存版をめぐるさまざまな発見や問題点を提供した今回の寛永二十年版『黒谷上人語燈録』表紙裏の反古抽出ワークショップは、まことに有意義なものがあつて、それを英断された渡辺守邦教授にあらため満腔の謝意と敬意を表し攔筆したいとおもう。

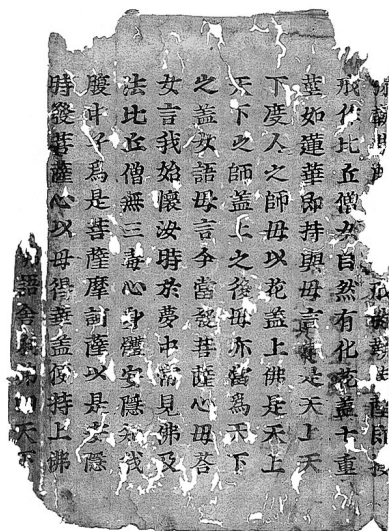
註

- (1) 渡辺守邦『古活字版伝説 近世初頭の印刷と出版―』（日本書誌学大系）五四）一九八七年二月 青裳堂書店。
同「ワークシヨップ 表紙裏反古の諸問題」（『実践女子大学文学芸資料研究所公開講演会報告書』一）二〇〇四年三月。
同「表紙裏反古の諸問題・統考」（『実践国文学』六八）二〇〇五年一〇月。
- (2) 中野正明『法然遺文の基礎的研究』一九九四年三月 法藏館。
(3) 石井教道編『昭和法然上人全集』一九五五年三月 浄土宗務所。
(4) 龍谷大学仏教文化研究所編『黒谷上人語燈録（和語）』（龍谷大学善本叢書）一五）一九九六年四月 同朋舎出版。
(5) 『日本古典籍書誌学辞典』一九九九年三月 岩波書店 五九三頁。
(6) 註（4）の七六二頁。
(7) 宗存版については註（5）の二八一頁に簡記しておいたが、詳しくは左の報告書や図録を参照されたい。
滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『延暦寺木活字関係資料調査報告書』本編・図版編 二〇〇〇年三月 滋賀県教育委員会。
叡山学院編『第八十五回大蔵会展観図録―延暦寺蔵宗存版木活字―』二〇〇〇年一月 叡山学院。
(8) 小山正文「宗存版『大蔵目録』」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』二二）番号 1056 一一頁 二〇〇三年二月。
(9) 註（8）の番号 1058 一一頁。
(10) 当日配布の間島由美子氏作製の資料による。
(11) 註（8）の番号 1427 一四〇頁。
(12) 鈴木徳三編『弘文荘待賈古書目録索引』一九八八年五月 八木書店 二四三頁。
(13) 註（8）の番号 一四二頁。
(14) 註（7）の図版編 写真一五七〜一六五参照。
(15) 奈良県教育委員会事務局文化財保存課編『奈良県所在 近世の版本 大般若経調査報告書』本文篇 一一頁・一九〜二〇頁・四五頁・七一頁・七二頁・一〇三〜四頁 資料篇 一頁・一三頁 三一頁 二

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

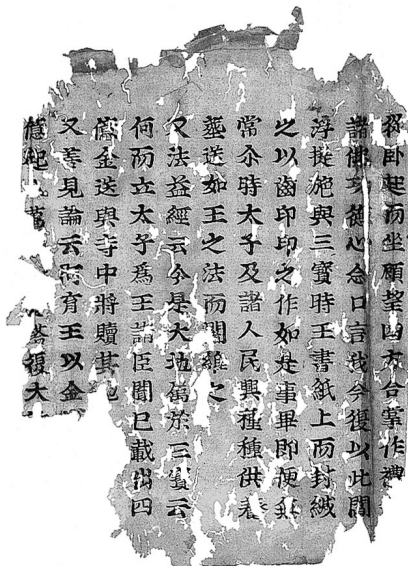
- 〇〇五年三月 奈良県教育委員会。
(16) 註（8）の番号 426 六九頁。
(17) 註（8）の番号 1486 一四四頁。
(18) 註（8）の番号 996 一〇八頁。
(19) 智山伝法院編『運敵蔵所蔵目録』一九九一年一〇月 真言宗智山派宗務庁 七頁。
(20) 註（14）に同じ。
(21) 註（8）の番号 1430 一四〇頁。
(22) 註（7）の本編 二二九頁 二二二頁参照。
(23) 註（7）の図録 一六〜七頁。
(24) 長澤規矩也編『日光山「天海蔵」主要古書解題』一九六六年一月 日光山輪王寺 五三頁。
(25) 註（8）の番号 938 七五頁。
(26) 註（1）の渡辺守邦『古活字版伝説―近世初頭の印刷と出版―』八七頁参照。
(27) 松永知海「天海版一切経覚書」（石上善応教授古稀記念論文集『仏教文化の基調と展開』二卷所収）二〇〇一年五月 山喜房仏書林。

図版1 経律異相卷第十二



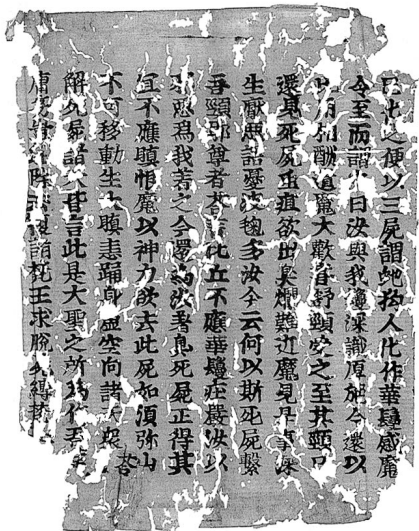
11-22

図版2 法苑珠林卷第三十七



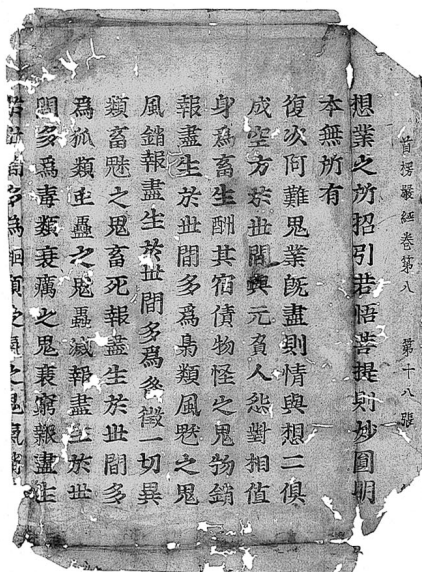
11-31

図版3 付法藏因縁伝卷第三



12-22

図版4 大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経卷第八



21-22

図版5 諸經要集卷第三

諸經要集卷第三
 第一
 地大塔呀為尊故若
 無大塔或起小塔以所為同故
 又何舍經云有以種人起塔
 來二阿舍佛三象問四輪王
 又十二因緣經云有八人得是
 地來二菩薩三緣覺四羅漢五
 六助陀含七須陀洹八輪王昔
 下起塔矣一緣見之不待
 聖塔故初果一緣見之不待
 八聖塔入眼已上並是佛
 又僧律云初起塔者
 地作塔瘦不待在南不待
 更應在好不待佛地

21-31

図版7 大般涅槃經卷第十八

十方一切佛 復願諸眾生 永滅諸煩惱
 了了見佛性 猶如妙德華
 余時卅尊讚阿闍世王善哉善哉若
 有人能發菩提心當知是人則為諸
 嚴諾佛大衆大王汝昔已於毗婆尸
 佛初發心轉多羅三藐三菩提心
 是已來至我出世於其中間未曾
 於地獄墮苦大王當知菩提心
 有如是無量果報大王從今已後常
 當勤修菩提之心何以故是是因緣
 當勤修菩提之心何以故是是因緣

31-22

図版6 付法藏因緣伝卷第三

付法藏因緣伝卷第三
 今已成就身我
 之言才有所
 乎愛波越多性能市肆會其若小復不肯與
 尊者語言佛託此人於百年後大作佛事觀
 益眾生汝可開心我此心多聞已反聽
 出家而和將玉清坊處念出家與受具
 沙門者已得羅漢道三洞六通具八解脫
 功者 信辭所演無盡心自心我亦會得
 佛法也末
 良也 侍者
 其 師
 至其所尋常

22-22

図版8 付法藏因緣伝卷第三

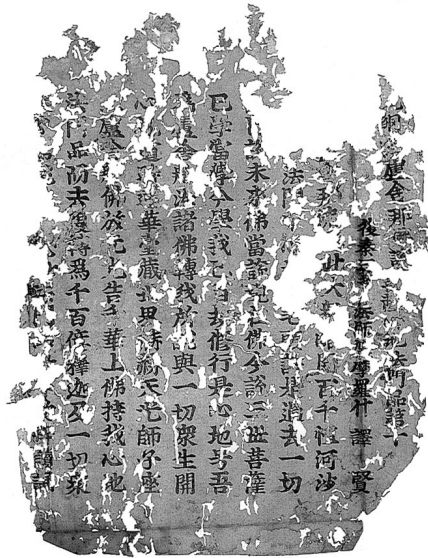
衣上尊佛上因方初在初作是言願諸眾生
 遊樂凡二十萬亦悉雲集留上座處無敢
 尊者王問衆僧何故留此空坐處耶耶舍答
 曰有次羅漢名寶頭盧如來所記能師子
 威德高勝今當來此王聞是已身毛皆豎如
 優曇羅花初始開敷即便合掌而待時
 盧理諸羅漢如獅王羅漢空下
 衆會皆起恭敬王見尊者眉秀白身體相
 好如辟支佛即為作礼五體投地問言大聖
 如來不答曰曾見色若金 銀面如滿月

31-31

寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

一五

図版 21 梵網經盧舍那仏説菩薩心地法門品第十



71-22

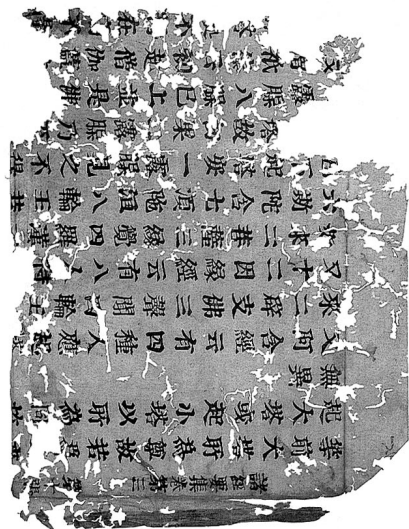
図版 22 法苑珠林卷第三十七



71-31

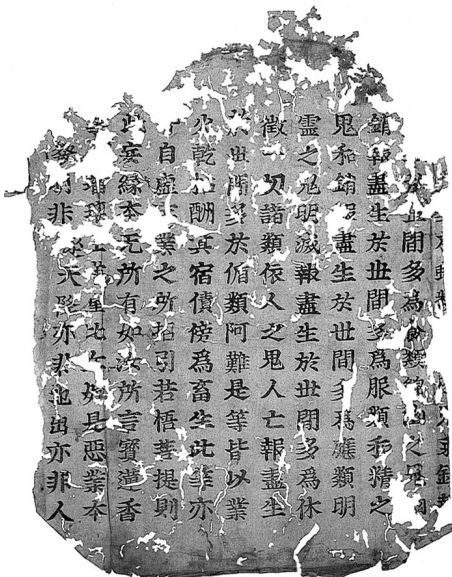
寛永二十年版『黒谷上人語燈録』の表紙裏より抽出された宗存版

図版 23 諸經要集卷第三



72-22

図版 24 大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經卷第八



72-31

一九

經律異相卷第四十八 寶金剛經 佛曼寶唱等集

金翅二事
 千秋二事
 鴈三事
 鷓鴣四事
 鴿五事
 雉六事
 烏七事

金翅第一
 生住所資一
 正首王死相二
 生住所資一

金翅鳥有四種一者卵生二者胎生
 三者濕生四者化生皆先大布施心
 高凌虛苦惱衆生心多顛憊生此鳥
 中有如意寶珠以為嬰珞變化萬端
 無事不辨身高四十里衣廣八十里
 長四十里重二兩半食龍鱗魚鼈
 以為揣食經云能食能消一龍洗
 浴衣服悉細滑食亦有猊烟兩身相
 觸以成陰陽壽一劫或有戒者大海

涅槃經卷第三十一 第十二張 疑

是故我言佛性未來善男子我為衆
 生或時說因為果或時說果為因是
 故經中說命為食見色為觸未來身
 淨故說佛性世尊如佛所說義如是
 者何故說言一切衆生悉有佛性善
 男子衆生佛性雖現在無不可言無
 如虛空性雖無現在不得言無一切
 衆生雖復無常而是佛性常住無變
 是故我於此經中說衆生佛性非內
 非外猶如虛空非內非外如其虛空
 有內外者虛空不名為一為常亦不
 得言一切處有虛空雖復非內非外
 而諸衆生悉皆有之衆生佛性亦復
 如是如汝所言一闍提輩有善法者
 是義不然何以故一闍提輩若有身
 業口業意業取業求業施業解業如
 是等業悉是邪業何以故不求因果
 故善男子如呵梨勒果根莖莖葉花
 實悉若一闍提業亦復如是
 善男子如乘具足知諸根力是故善
 能分別衆生上中下根能知是人轉

大般若波羅蜜多經卷第二百二十一
 初分難信辭品第三十四之四十
 三藏法師玄奘奉 詔譯
 復次善現法住清淨故色清淨色清淨故一切智智清淨何以故若法住清淨若色清淨若一切智智清淨無二分無別無斷故法住清淨故受想行識清淨受想行識清淨故一切智智清淨何以故若法住清淨若受想行識清淨若一切智智清淨無二分無別無斷故善現法住清淨故眼處清淨眼處清淨故一切智智清淨何以故若法住清淨若眼處清淨若一切智智清淨無二分無別無斷故法住清淨故耳鼻舌身意處清淨耳鼻舌身意處清淨故一切智智清淨何以故若法住清淨若耳鼻舌身意處清淨若一切智智清淨無二分無別無斷故善現法住清淨故色處清淨故一切智智清淨何以故若法住清淨若色處清淨若一切智智清淨無二分無別無斷故法住清淨故聲香味觸法處清淨聲香味觸法處清淨故一切智智清淨何以故若法

梵網經菩薩戒序
 諸佛子等合掌至心聽我今欲說諸佛大戒序衆集默然聽自知有罪當懺悔懺悔即安樂不懺悔罪益深無罪者默然默然故當知衆清淨諸大德優婆塞優婆夷等諦聽佛滅度後於像法中應當遵敬波羅提木又波羅提木又者即是比戒持比戒持如闇遇明如貧人得寶如病者得差如因擊出獄如遠行者得歸當知此則是衆等大師若佛住世無異比也怖心難生善心難發故經云勿輕小罪以爲無殃水滴雖微漸盈大器剝那造罪殃隨無間一失人身萬劫不復壯色不停猶如奔馬人命無常過於山水今日雖存明亦難保衆等各各一心勤修精進慎勿懈怠懶墮睡眠縱意夜即攝心存念三寶莫以空過從設疲勞後代深海衆等各各一心謹依此戒如法修行應當學
 菩薩戒序
 歸命禮舍那十方金剛佛亦礼前輪主當學慈氏尊今說三聚戒菩薩戒共聽戒如大明燈能消長夜闇戒如真寶鏡照法盡無遺戒如摩尼珠雨物濟貧窮

執筆者紹介

小山 正文

(同朋大学大学院非常勤講師 研究所顧問)

塩谷 菊美

(神奈川県立茅ヶ崎高校教諭)

武田 龍

(客員所員)

青木 馨

(同朋大学非常勤講師 客員所員)

安藤 弥

(同朋大学専任講師 所員)

高橋 良政

(日本大学法学部教授)

嘉木揚 凱朝

(中国社会科学院世界宗教研究所研究員 客員所員)

Gyana Ratna Sraman

(愛知学院大学非常勤講師 客員研究員)

同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十六号

平成十九年三月二十五日 印刷

平成十九年三月三十日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編集者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島 惠昭

電話 ○五二―四一―一三三三

発行所 同朋大学佛教文化研究所
印刷所 株式会社 一誠社